

万葉山柿考

市村 宏

一

大伴家持が越中守になったのは天平十八年(七四六)であつたが、その時越中掾として彼の下に同族の大伴池主がいて、公私ともに家持を扶けていた。二十九歳の若さで初めて国司となり、越中に赴任した家持は、政務の閑散を利用して殆ど歌三昧ともいふべき日をおくり、国庁に勤務する彼の部下にも風雅の友たるべき人が多く、中にも掾池主は知音ともいふべき交情に結ばれ、彼我の間にしばしば書翰和歌の贈答が繰返されたことは、万葉集卷十七に記載するところをみれば明白である。天平十九年(七四七)二月二十九日付の「守大伴宿柰家持贈大伴宿柰池主悲歌二首」、および池主から家持への返

ものも異数であつて、考察すべき問題を含んでいるけれども、殊に三九六九番歌の右にある家持の書翰、
含弘之德垂恩蓬体不質之思報恩陋心載荷末眷無堪所喻也但以稚時不涉遊芸之庭橫翰之藻自乏乎彫虫焉幼年未至山柿之門裁歌之趣詞失乎葉林矣爰辱以藤統錦之言更題將石同瓊之詠因是俗愚懷癖不能黙止仍捧數行式酬嗤咲其詞曰

および、これに対する池主の返翰中

七步成章數篇滿紙巧遺愁人之重患能除恋者之積思山柿謂泉比此如

蔑

をみれば明白である。天平十九年(七四七)二月二十九日付の「守大伴宿柰家持贈大伴宿柰池主悲歌二首」、および池主から家持への返翰返歌(元室一五六)が掲げられるのに続いて、「更贈歌一首 拝短歌」と題し、書翰と長・短歌(元室一五六)を掲げ、「三月三日大伴宿柰家持」と記した後に「七言晚春遊覧一首并序」が添えられまた「三月四日大伴宿柰池主」として池主からの返翰と反歌(元室一五六)を掲げ、さらに「三月五日大伴宿柰池主」として前記家持から詩を贈つたのに対する池主の返翰と、七言一首並に短歌二首(元室一五六)を掲出する。この矢継早に行われた書翰詩歌の贈答その

として再び繰返されている山柿の語が何人かを意味するかを中心に、いわゆる山柿論争が展開され、柿は柿本人麿として疑われなかつたが、山を山部赤人とするか山上憶良とするかに分れて議論が繰返され、今日に至るも未だ決着するところをみない。しかもこの問題に関する学界の関心は依然として衰えず、最近にも川口常孝氏の「山柿の論」(国学院高等学校校紀要)第二輯、岡部政裕氏の「山柿論私見」(静岡大学文学部研究報告人文科学)第一〇号、太田善麿氏の「大伴家持と『山柿の門』の意識」(神道学)第二十九号、昭和三十六年二月古代文学会における口頭発表に基づく)などみるべ

き労作が続々と発表されている。さらに雑誌「国文学解釈と鑑賞」昭和三十七年六月号は「古典文学論争事典」と題して編まれ、「山柿論争」の経緯を解説するとともに文献をも紹介してある。

家持池主によって何等の疑義なく使用されたこの語を、千年の歲月はその意義を不明にし、後世の万葉学者をして甲論乙駁せしめるに至ったのである。私もまた諸家の驥尾に附して、昭和三十五年六月十日東洋大学国語国文学会において「万葉山柿論余考」の題下に私見を述べ、また「万葉二六番歌考」（国文学攷）第二十八号、斎藤清衛先生古稀記念特集）中にもこの問題に言及するところもあったが、いままた「古代文学」第二号に執筆を求められ、再度稿を起して本問題につき卑見を述べる機会を与えられたのである。

二

山柿論争の詳しい経緯等については、前掲の文献にも記述されているから、ここには省筆を許されるであろうが、争点は専ら山柿の山に集注されて、この山を山部赤人とみるか山上憶良とみるかにより、人麿赤人併称説と人麿憶良併称説との対立となっている。

そもそもこの論争の中心に立たれたのは久松潜一博士で、同博士の著書「万葉集考説」の第四編「万葉集の精神」三「山柿と日本の性格」および「万葉集とその前後」の第二章「万葉歌人の類型」一、「山柿の論」の二つをみれば、問題そのもののものつ意味も、論争の経過も、同博士の所論と併せ知ることができる。今便宜上「山柿の論」中、次の部分を引用して読者の理解に資したい。

山柿といふのは家持が天平十九年三月三日大伴池主に贈った歌の詞書に「幼年未_レ達_二山柿之門_一裁歌之趣詞失_二乎_一聚林_一矣」（卷十

七）とあり、三月五日大伴池主が答へた歌の詞書に「山柿調泉比_レ此如_レ蔑、彫龍筆海衆然得_レ看矣」とある。この場合に柿は柿本人麿であることは疑ないが、山は山部赤人とも山上憶良とも文字の上では見られるので、何れをとるかといふ点に問題がある。さうして古今集序に人麿と赤人とを並べて論じて以来、赤人として見るようになったのである。然るに近世の末になつて憶良とする説が現れた。

西田直養の笈舍漫筆巻四、歌聖の条の張紙に此山柿の柿は柿本なる事は論なし。山は山辺赤人とのみ申伝へ侍れども、若くは山上憶良などにはあらずやとも思ひ侍り。さるはかの長歌のみ口のけぢめ聊か侍るやうなり（歌学論叢）

とある。佐佐木博士はこの張紙は直養の筆ではなくて、笈舍漫筆をよんだものの記し添へたものと覺しいといはれてゐる。この説を引きながら佐佐木博士は山を憶良とする説を称へられたが、これに対しては島本赤彦が反対して赤人とする説を支持してゐる。

（筆者註、「歌道小見」参照）然し森本治吉、久米常民氏等は憶良説を支持してをり、久米氏の説は「国語と国文学」昭和十五年第十号に山柿論として発表されてゐる。（筆者註、森本説「万葉集の芸術性」参照）赤人説を支持するものとしては島本氏等の他私も山柿論を昭和十五年七月の国学院の万葉講座で発表し、それをもとにして「山柿と日本の性格」（国語と国文学、昭和十六年一月）を発表した。井之香樹氏も「山柿考」（国語と国文学、昭和十六年七月）を発表して赤人説をとつてゐる。

憶良説の根拠の中心となる点は、万葉集を代表する歌人は人麿とともに、赤人よりも憶良をあげるべきであるとする点にある。そ

これは憶良の人生的傾向が近世末期以来次第に重んじられて来たことと併せて、人麿とならぶのは憶良であるとする見解が、山柿の山をも憶良とするに至ったのではないかと思ふ。それに対して私は家持のいつた山柿之門といふのは、山と柿とを万葉の代表歌人としてのみでなく、家持が幼年以来尊敬しながら直接に学ぶことの出来なかった歌人として挙げてゐると見るのである。

こうして久松博士は、家持が尊敬しながらも遂に会うことのできなかった人、その門に至り得なかつた人であるべきだとの見方から、憶良が旅人の親友で家持もこれに親炙していた点からみて、赤人説をとられたのである。しかし、例えば武田祐吉博士は、全註釈に「幼年云々」の箇所を通釈し、

幼年の折、まだ山上憶良や柿本人麿の門に行きませんでしたので、歌を作ります様は、言葉が混雑してしまします。

とされ、問題の「山」を憶良と解された上に「葉林」の語をも同じく憶良の類聚歌林とみる新説を提唱されている始末で、依然、赤人か憶良かの両説は対立のままである。

三

延喜の昔、古今の序に紀貫之が人麿赤人を併称したのは、ここにいわゆる山柿の語に關つてのことではない。貫之の万葉歌人に対する評価が人麿赤人を最高とみ、この両者を伯仲の間にあるものとしているに過ぎない。然るに山柿の語が注目されるに及んで、当然のことのように古今序が想起され、連想されて山柿を二人の名の連結から成る語ときめつける先入観をなしてしまつたらしい。そもそも門というにその門の主が二人であるということからして、私には納

得がゆきかねるし、また山柿の文字を虚心に訓めば何人もヤマガキと訓むべきを、そのよみ方を全く無視してヤマとカキとによみヤマは誰、カキは誰と論争すること自体、或は古今序の暗示にかかつてのことではないかとのおそれを感じるのである。山柿をヤマガキとよみ、山柿之門をヤマガキノカドとよむならば、そもそも山柿論争は起る余地がなくなつてしまふ。ヤマガキノカドのうちに住む人唯一人を指すものとみるのが当然である。柿園の主は加納諸平、双柿舎の主は坪内逍遙、それぞれ主は一人に限る。それを山柿といえは山部赤人と柿本人麿と当然のことのように後世の学者がこれを二人と思ひ込み、さらに山部に山上を代入する異論へと発展するというのは、全く古今序の「人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立たむことかたくなむありける。」の詞句が強力な呪文となつて、近世万葉学者の思考を咒縛した結果ではなからうか。

それにまたわれわれ現代に生きる日本人は、固有名詞の漢字を二つ三つとよせあつめて作つた言葉に慣れ切つてゐる。日清・日露・日英・日米・日蘇・日中・日独伊など国名の頭字を結ぶ例は最も顯著であるが、国内でも上越・信越・羽越・陸羽・芸備(芸は安芸で、安州といわず芸州とよぶ)・播但・筑豊など鉄道路線の名に多く、都市名から京成・京阪などの称呼も用いられ、日常われわれの耳目に熟してゐる。人名についても、隈板内閣といえは大隈重信と板垣退助の連立内閣を意味し、团菊左といえは明治の梨園に鼎立した市川团十郎・尾上菊五郎・市川左团次の三人、紅露は明治二十年代の文壇に對峙した二大家尾崎紅葉と幸田露伴とである。漢字の特性を利用して、簡潔に齒切れのよい表記をするために、わが国が中国に学んで一層乱用するに至つたもので、明治以降世の中が忙しくなるにつれてい

よいよ流行して今日に至り、角界にさえも柏鵬時代の現存する所以である。

しかしこの種の呼称は近世以来こそこのように盛んに用いたれ、時代を溯つては対立の事實はあつてもそのような呼称はなく、藤橘といひ紫清と呼ぶもみな後世の造語である。このような言葉作りは前述の通り中国の模倣で、孔墨・道釈・李杜などの語が手本にされたと思われるが、恰もわが天平の時代海彼に詩名を馳せた人々、李白杜甫を家持らが直ちに李杜と呼び得たか否かは疑わしい。

さらに、当時わが国では漢字を人名に宛てるにしても、或は表意に或は表音に、自由奔放に使われており、統紀にみても旅人は多比等・淡等、三方が御方・御形、勝雄が堅魚と記され、集中にも赤人が明人、奥麿が興麿・奥麻呂・意吉麿・意吉麻呂の五様に書かれてゐるなど、用字が一定せず、姓は名ほどの混雑はないにしても、刑部が忍坂部・忍壁と書かれ、憶良の姓山上が統紀には山於とも記されるなど必ずしも混乱の事例に乏しくない。地名もまた同様で、例示するまでもないが、シナノを信濃とコシを越と書くことを前提として信越の語が作られるのであつて、信濃・科野など放任に漢字が使用される状態の中では、信越の語は作り得まいし、それと同様中国の例を模倣するにしても、姓名の用字が不定では、明治時代の紅露と同様、果して天平の世に二人の姓の一字を連ねて山柿の語が作られたかどうかは甚だ疑わしい。

赤人の名も、山上の姓も用字が一定せず、種々の表記が統紀や万葉集にみられるこの時代に、今日理解されている意味でのサンシ（山柿）は、未だあり得ないのではなにかとの疑問をまず提出したものである。

次にこの種の呼称は、同時に同じ貫録を備えて何々相對峙する二人物がなくては行われない。団菊も紅露も、孔孟も李杜もみなそのような条件の下に行われた言葉で、時期がずれ對峙の事實がなくてはこのような言葉は生れて来ない。李白は七〇一年に生れ、七六二年に没し、杜甫は七一二年に生れ七七二年に没し、ともに盛唐の詩壇に名を競つたが故に李杜と呼ばれたのである。今日のわれわれは大難把に万葉時代などと呼ぶが、家持池主の時点に立てば、人麿は前時代の大歌人であり、赤人や憶良は同時代の先輩というに過ぎない。家持の時点からすれば、人麿赤人でさえ時間のずれがあつて對峙という条件を欠いている。その頃、人麿は既に歌聖の域に入りつつあつたが、赤人には、力量の差はいわぬにしても、未だ神格化されるためには時間が不足している。古今時代になつて貫之の目からみてこそ、人麿も赤人もともに万葉歌人として映ずる。いわんや憶良は小倉百人一首にさえ採られておらず、憶良の真価は近世になつてようやく認められるに至つたのである。今日の評価において憶良がいかに赤人を凌ぐとも、家持の用語たる山柿の解釈には何等関りがないし、もちろん私見には毫末も影響するものではない。私は山柿はヤマガキと訓み、人麿唯一人を指すことの論証に努めてゐるのである。

仮に今百歩を譲つて、山柿を二人とみるなら、何故に家持は柿山といわず山柿といったであらうか。古今序は人麿赤人を對等の歌人とみながら、なおかつ人麿の名をさきに赤人の名をあとにしてゐる。このことは極めて常識的で、仮に同等の力量であつたにしても、人麿は赤人に先んずる前代の大歌人であるから、人麿よりも赤人をさきにされたのでは、われわれには素直に読めなくなるはず、

山柿という表記が何故この点で疑問をもたれなかったのであらうか。日本と中国のことを日本側では日中といい、中国側では中日という。日中友好中日友好という対等の表現であつても、おのずからそうでなくてはならぬ順序がある。家持がもし人麿と赤人もしくは億良の意味でこの造語を敢てするなら、必ずや山柿とはいわず柿山といったはずで、人麿を後に置くことは絶対にあるまい。しかも柿山とはなく、山柿とあること自体がサンシではなくてヤマガキであることの証左なのではなからうか。山柿を柿山としても毫も語呂を悪くするでもなく、むしろ柿山之門の堂々たるに如かぬのである。

しかるに家持が山柿之門と書いたのは、ひとり歌聖と仰ぐ柿本人麿のみを指したのであつて、ヤマガキノカドを意味する。ではヤマガキがどうして柿本人麿を象徴することになるのか。新撰姓氏録（類従本）の柿本朝臣の条をみると、

大春日朝臣同祖。天足彦国押人命之後也。

敏達天皇御代。依^{モト}家門有^{モト}柿樹^{モト}為^{モト}柿本臣氏。

とあつて、そもそも柿本姓の起原は、家の門に柿の木があつたことに由来すると信じられていたのである。これは柿本家に伝わる伝承であつたと思われるが、この伝承は或は事実かも知れず、またカキノモトという名を説明するために作られた説明伝説であつたかも知れない。しかしそれはいずれでもよくただ當時の人々に、しかく信じられていたことを姓氏録によつて知ることができたのである。姓氏録にあるということはこの伝承の古さと權威を示しており、家持や池主もまたそう信じていたとみてよからう。

柿本姓の名義については、折口信夫博士、高崎正秀博士に垣本説があつて、高崎博士の「文学以前」に収められた「小集樂考」（同

書二二八頁）には、

折口先生によれば平安朝期の垣^{シロガ}下の衆、垣本^{タキモト}襲^{シロガ}など云つた垣^{タキモト}下は、本来は柿本人麿らの柿本も同じこと、宮廷の御垣の下にあつて、歌舞奏樂のことに従事したものであつた。謂はば上代の久米部の職掌の分化したもので、クメ・クベもカベ・カキも同語、久米歌久米舞に見ても宮廷の御垣守であり、歌舞によつて忍び寄るもの（靈物）と靈^{モリモノ}譯^{ミヤコト}ひし、これを遮断し追ひ遣らふべき部曲であつたのだ。

とあつて、この垣が歌垣にまで延長解釈される師弟相承の学説が存するのである。柿本朝臣が久米臣・布留宿禰と同族であることは、姓氏録にも明記されており、これもまた示唆に富む説ではあるが、当面の問題として、この学説の存在は毫も私の見解を妨げるものではなく、ただ古代の人々が、柿本朝臣の名はその門に柿の木があつたのにもとづくと信じていたであらうことを姓氏録が示してくれ、この伝承により「山柿之門」（「やまがきのかど」の意）の語が作られ、従つて「幼年不^レ達^二山柿之門^一」とは、幼年時代には未だ人麿の道すなわち歌の道に入らうとしなかったことを意味するものと理解できるのである。

しかし姓氏録に「柿樹」とあるものを、ヤマガキと解釈するためにはなお説明が必要であらう。門のところにあつてそれが姓氏の起原とまでなつたというからは、その柿樹は邸宅を設けてから景物として植えたとか、または実を採るために栽植したとかみるべきものではなく、邸宅のおかれる以前からそこに自生していた大木であつたはずで、このように自然に山野に自生する柿を古代からヤマガキと呼び、栽培種のカキと区別した。

和名抄二十卷本の卷十七菓類第二百二十一に、

柿 説文云柿 音市和名實岐 赤実菓也

とあるに並べて、

鹿心柿 兼名苑注云鹿心柿 和名夜未加岐 柿之小而長也

とある。柿は栽培種、鹿心柿——夜未加岐は野生のカキである。延

暦四年（七八五）八月まで生きた家持の語彙にヤマガキのあったで

あるうことは、この和名抄の記載によつてほぼ疑なしとされよう。

「カキノモトというのは、ヤマガキが門のところに生えていたから

ついた名だそうな」——このような伝承を家持も耳にしていたこと

と思われる。彼の時代には人麿は既に歌聖化されつつあつて、歌道

はすなわち人麿の道と考えられており、未だ歌道に志すところのな

かつたことを山柿の門に達らずといつたのであろう。もちろん山が

山部赤人か山上憶良かという議論が、千年のちに闘わされような

どとは、家持の全く予想せぬところであつた。従つて池主が「山柿

謂泉比此如し蔑」と書いたのは、「どうして人麿跳しでいらつしや

います」とばかり、上官たる家持に巧言を呈しているのである。

幼い頃、近所の文盲の老人が「わしは天神さまと仲が悪くてね。」

としばしばいうのを耳にした記憶がある。天神さまとは菅原道実の

ことで、学問書道の神であるから、文盲なことを自ら卑下してこ

いつたのである。「未達山柿之門」というのも、つまりは「人麿

さまと仲が悪くて」とか「御縁が薄くて」とかいうほどのことで、

山と柿とがたまたま万葉三大歌人の名字に当るところから、はしな

くも山柿論が捲き起つたが、家持の時点に立てば、歌道においてこ

の天神さまに当るほどの人は、人麿以外にはあるはずがない。赤人

くその真価が認められたもので、家持が先輩たる赤人憶良の歌に学ぶところは少くなかつたにしろ、彼等を歌聖人麿と同列にみるようなことは全くあり得ない。また家持が人麿を尊崇するための条件には、柿本朝臣が古来の名族であつたことも無視できぬかも知れず、この天平人の頭脳を、われわれ同様に考へてはなるまい。名族の出か卑族の出かは何ものにも優先して、人を評価する条件であつた時代である。柿本朝臣の祖天足彦国押人命とは孝昭天皇の皇子で、子孫は大春日朝臣、久米直、吉田連に分れて歷朝に仕え、天武朝に朝臣の姓を賜わり、爾來朝にあつても相当の地歩を占めた名族の一つであつた。上田秋成が「金砂」に述べる見解に従えば、人麿の近江荒都の歌は壬申の乱によつて滅び去つた同族のための鎮魂歌で、柿本氏は近江朝にあつて大いに繁榮し、はしくも壬申の乱のために一族の多くを失い、「大宮人の舟待ちかねつ」と人麿をして嘆ぜしめたものとみている。

天武朝となつても柿本佐留（猿）はその十年（六七）十二月に粟田真人ら十名とともに小錦下位を授けられており、元明天皇和銅元年（七三〇）四月二十日に卒去した際には従四位下で、諸家の説にしばしば猿丸大夫に擬せられるのはこの人である。人麿自身はおそらく初め舍人として朝仕し、芸能歌舞の方面を職として、のちに石見国庁に奉職する官人となり、守か介か掾か、多分は六位以下の官位に終つたのであろうが、さらに佐留・人麿にもおかれて同族中に名ある人物を求めれば、神亀四年（七二五）に従五位下を拜した柿本朝臣建石、天平九年（七三三）同じく従五位下となり、のち丹後守安芸守を歴任、主計頭を経て、天平宝字八年（七五五）に従五位上に進んだ市守、大仏の鑄造に与り、天平勝宝元年（七五九）に従五位下を拜し、翌年従五位

上に進んだ小(男)玉など、なお知名の人々を挙げ得るのである。山柿之門の榮光は和歌による人麿のみではなく、この意味からも山部や山上の卑族には、柿本とは比肩することのできぬ懸隔があった。氏族の尊貴を重んずる上代人の頭脳に選って考えてみることも、この場合若干の意味をもち得るのではなからうか。山部か山上かの山柿論は、古代を計るに近代の頭腦を以てしたために現れた蜚蜚語であつたかも知れぬのである。

百人一首一夕話の「柿本人麿」の条にこんな話がある。

或書にいはく、石見国、美濃郡戸田郷小野といふ所に、綾部氏の人あり。ある時、後園の柿の樹の下に神童立ちたり。何人ぞと問ふに「我は父母なし、唯風月の主として敷島の道をさとれりといふ。夫婦よろこびてこれを撫育す。生長の後出身して和歌の才徳をあらはしたまへりと書けり。此説論ずるには足らざる事なれど、石見国に綾部氏あり。一に語合といへり。其家は四十代血脉綿々として相つづき、しかも長寿の人多しといへり。そこに人麿の神祠もあり。そのところを柿本と名づく。人麿出現の柿の樹と云もあり。其柿の実は細長く尖り黒みて、筆先に墨の染みたるに似たり。世の人は是を筆柿とよべり。

この伝説もまた姓氏録にいうところの伝承の、末の世に流れての変型とみれば興味がある。人麿石見出生説は彼地では今も多くの人々に信じられてゐる伝承であるが、ここで必要なのは筆柿についての記述である。シナノガキといわれるカキの原生種を信濃でもやはり筆柿といい、和名抄の「柿之小而長也」と合致する実を沢山につける。小にして長ければ筆の穂に似、実の先端の黒点は柿の常であるが、筆に似るだけに「細長く尖り黒みて」といったのであらう。

四

以上、山柿論における第三説たる人麿単独論の可能性を試みてここに至った。今もう一度既述の主要論点を要約して串見を終る。

1 「門」というのにその主人公が二人とみることには先ず以て疑問をもつ、最初から二人と考えてしまうのは古今序の暗示にかかるからであらう。

2 家持が李杜とか紅露とかの語に類する意味で山柿の語を用いたとみるのは、時代としても尚早である。なおその意味ならば山柿といわず柿山と記すべきで、山柿とあるのはむしろ然らざることの反証であらう。

3 李杜・紅露などの語は、対立並立する二大人物をいう呼称で、時がずれたり、両者の貫録に差等があつては成立し得ない。人麿と赤人(または憶良)は、家持の時点にみれば、時代を異にし、氏姓の尊貴と相俟つて歌聖視されていたのは人麿のみである。

4 さらに根本的には、この時代には人名も地名も漢字表記はまちまちで、山上が山於、赤人が明人とも書かれるような時代で、姓名を表す文字は未だ固定しておらず、紅葉露伴を意味する紅露のように、山柿の語が成立つだけの基盤ができていない。

5 姓氏録が柿本姓の起原を説いて、門に柿樹があつたからと記している。自生する柿はヤマガキで、今日フデガキというものがそれである。山柿とは山と柿ではなく、ヤマガキであり、従つて山柿之門はヤマガキノカドの意味に解される。ヤマガキについては、和名抄の記述があつて傍証となる。